

青春スクロール

母校群像記

http://t.asahi.com/dnnn

何事にも真剣 学術・研究分野に逸材

多摩高校の卒業生は、学術・研究分野でも活躍する。

東大名誉教授で海洋研究開発機構海洋地球生命史研究分野長の鳥海光弘（67、1965年卒）は複雑地球科学は入学当初の成績は中の下だったが、卒



「体育祭の騎馬戦では暴れた。人間ピラミッドも7段組んだ」と懐かしむ鳥海



多摩高校 8

業時はトップに。研究の専門は若い頃は岩石学（レオロジー）で、日本での先駆的な存在でもあった。「普通は専門を変えないが、自分を変えた。多摩時代の経験から、集中すれば何でもできると自信がついたからかもしれない」と話す。

元九大教授で北星学園大教授の高橋孝三（66、66年卒）は気候変動学は、深海底を掘って堆積物から地球規模の気候変動メカニズムを探る研究の第一人者。2004年には世界で初めて北極点付近の海底を掘削し

北大の学生時代、東海大（札幌）の教員時代に続き、3度目の北海道生活を送る高橋



た。高校時代はワンダーフォーゲル部。週末は授業の後に丹沢に行き、八ヶ岳や谷川岳にも登った。「横浜翠嵐高、湘南高には山岳部があり、母校での創部ならずで悔しかった」

プラズマ研究の第一人者、九

大大学院教授の渡辺隆行（53、80年卒）は化学工学は陸上部員だった。3年の時、ハンマー投げで県大会で優勝し、高校総体にも出場。「何事も『適当にやろう』という人はおらず、みな真剣だった」。高校時代には話したことがなかったという妻美穂子（52、80年卒、旧姓・崎山）とは同期だ。

元国立天文台教授で名古屋大学院教授の杉山直（52、80年



博士論文の謝辞の中で「ハンマー投げと黒人音楽に感謝」と書いた渡辺

卒）は、校内の合唱コンクールで指揮をしたことを今も思い出す。子どもの頃からピアノとフルートを習っていた経験が生きたという。「高校時代は『まじめに遊ぶ』ことを覚えた。いい加減に遊ぶと身につかない。多摩高生は妙なプライドを持たず、打たれ強い人が多かった」。舞台美術家として活躍する弟の杉山至（48、85年卒）も多摩高卒だ。

三菱総研に25年間勤めた後、拓殖大教授に転じた白石浩介（49、83年卒）は経済学は「当時の授業料は年6万円なのに先生は研究熱心で優秀。経済の専門家から見て、コストパフォーマンスのいい学校だった」

多摩高の部活は運動部14、文化部14、文化系同好会が2ある。ほぼ全員が入部し、兼部もいるため加入率は例年100%を超す。文化部で部員が多いのはギターアンサンブル、吹奏楽、合唱、軽音楽。開校時から続く合唱部は受賞歴が多く、2013年度の青少年読書感想文全国コンクールの課題図書「歌え！多摩川高校合唱部」（本田有明著、河出書房新社）のモデルになった。

と言う。新聞部だったが「部員が集まらず、年に1回出せたかどうか」。先生が生徒を子ども扱いしなかったので「自分で責任を持たなければ」という気持ちになった」と懐かしむ。